

2. 地質と地形の概要

2. 1 表層地質および地形

阪神・淡路地域の表層地質図[2.1-1]を図2.1-1に示す。いずれも活断層の存在により特徴づけられるが、表層地質および地形には次のような違いがある。

①淡路島北部：島の骨格として領家帯と呼ばれる花崗岩類と第三紀層の神戸層群が露頭し、海岸沿いの低地には第四紀層の大阪層群もみられる。

②神戸市街と阪神間西部：東西方向に約22 km、南北方向は3～5 kmほどの間に細長くつながる市街地は、北から順に山麓線、縄文海岸線、明治期の自然海岸線という3本の境界線により、南北方向を次の4地帯に区分[2.1-2]される。

I：山地帯 おもに六甲花崗岩で構成され、並行して走る数条の断層のため南落ち急斜面による階段状の地形を示す。表層の花崗岩は風化によりマサ土化し、豪雨の度に土砂災害を引き起こしてきた。

II：山麓扇状地 十数の中小河川による複合扇状地で、大阪層群の上を土石流起源の砂礫層が覆い、緩傾斜の地形を示す。図2.1-2のように、河川の旧流路には玉石や礫質土が多く、流路から離れるとマサ土による砂層が堆積[2.1-3]する。

III：海岸低地帯 扇状地の末端の縄文海岸線と明治期の海岸線の間広がる平坦な海岸平野地形で、潮流によって形成された砂州部と、その背後の後背湿地からなる。地表面付近は主として砂質土が分布するが、II IIIとも、図2.1-3にみられるような層厚・層相の変化が著しい不整形地盤域[2.1-4]である。

IV：埋立地 戦前の海岸沿いの埋立は三角州などの自然地形を生かして行われ、戦後の沖合いの埋立はおもに六甲山地から掘削したマサ土の投入による。旧海底下の軟弱粘土層厚は、沖合いほど厚くなる。

③阪神間東部：武庫川や猪名川などの扇状地および三角州が開け、地形としては比較的平坦地が広がる。

2. 2 活断層

すでに存在が明らかな活断層の分布[2.2-1]を図2.2-1に示す。これらのうち、今回の地震との関連がいわれているのは、淡路島北部の(1)野島断層、神戸市街の(35)須磨断層、(80)会下山断層、(79)諏訪山断層、阪神間の(65)芦屋断層、(66)甲陽断層、(67)伊丹断層などで、まとめて六甲断層系と呼ばれている。なお、これら以外にも未発見の断層が存在する可能性もある。 [奥田晁、若松邦夫]

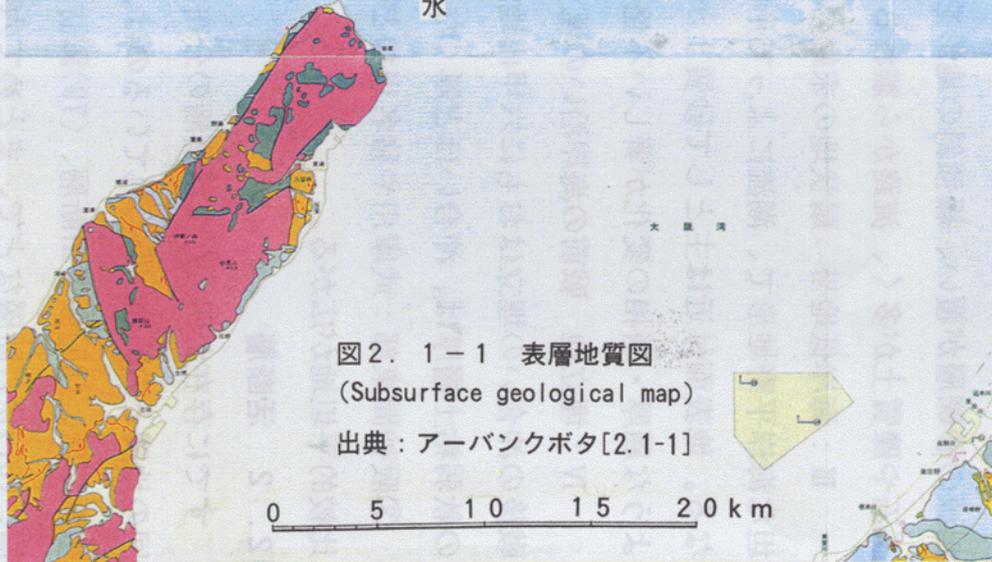
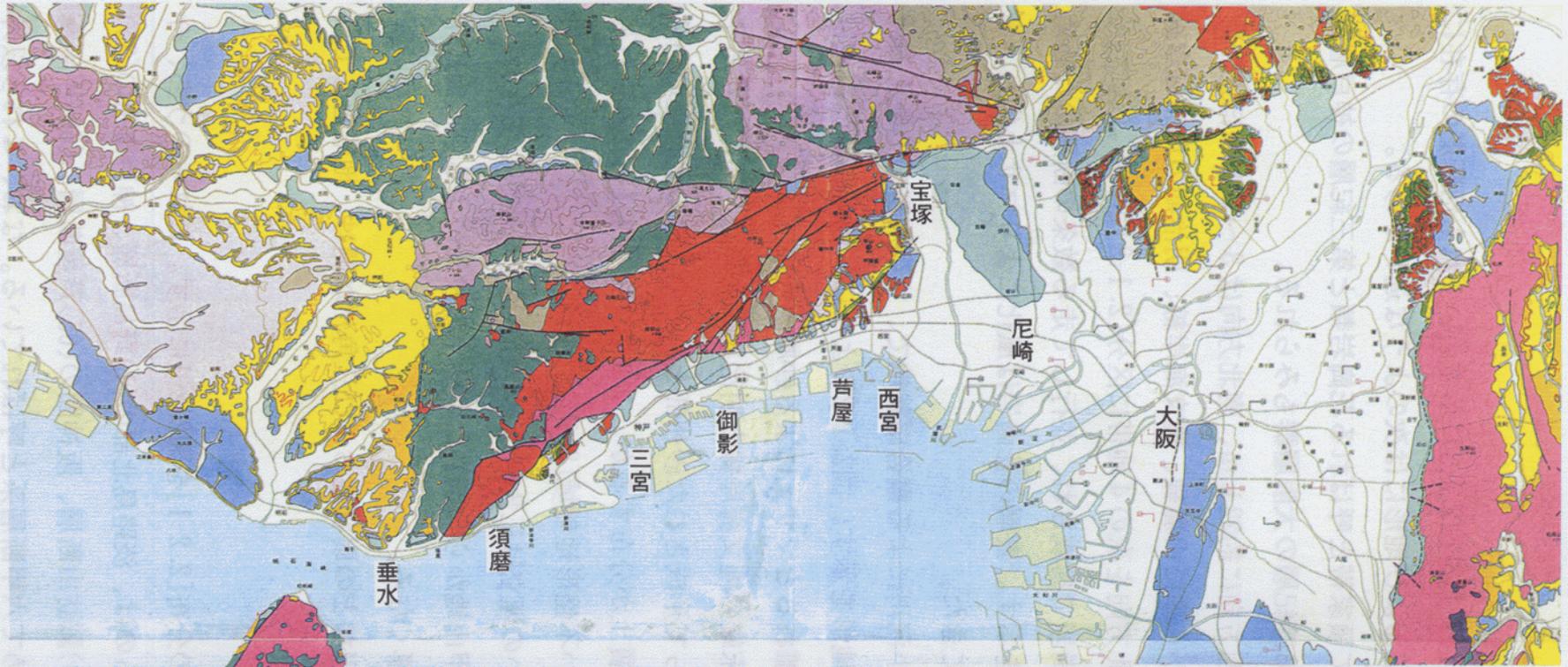
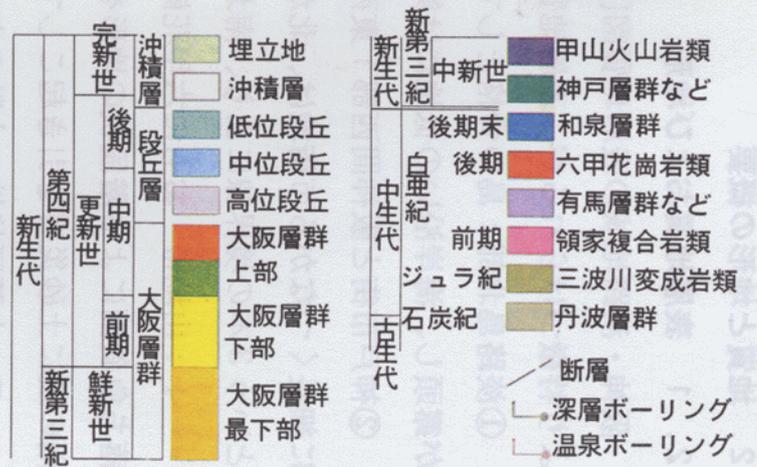


図2. 1-1 表層地質図
(Subsurface geological map)

出典：アーバンクボタ[2.1-1]



凡例			
	山地市街地界		玉石地帯
	古海岸線縄文		大阪層群
	沖積粘土(2m以上)		砂州
	沖積粘土底高		粘土多質地
	古生層		まさ土
	花崗岩		砂粘土
	神戸層群		埋立地
	河川 旧河川		断層 推定断層

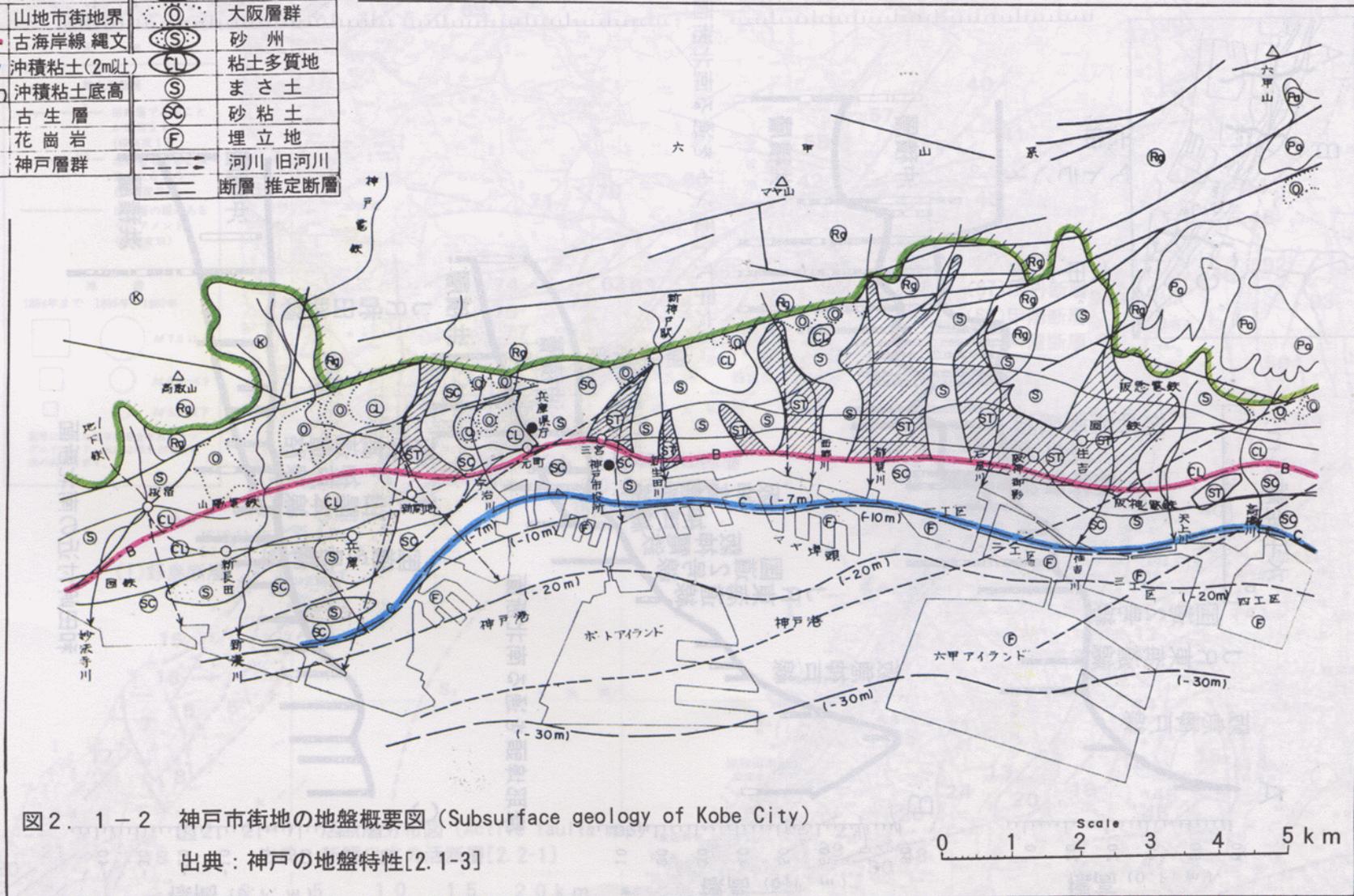


図 2. 1-3 断面概要図 (geologic sections) [2.1-3] 神戸市街地の地盤概要図 (Subsurface geology of Kobe City)

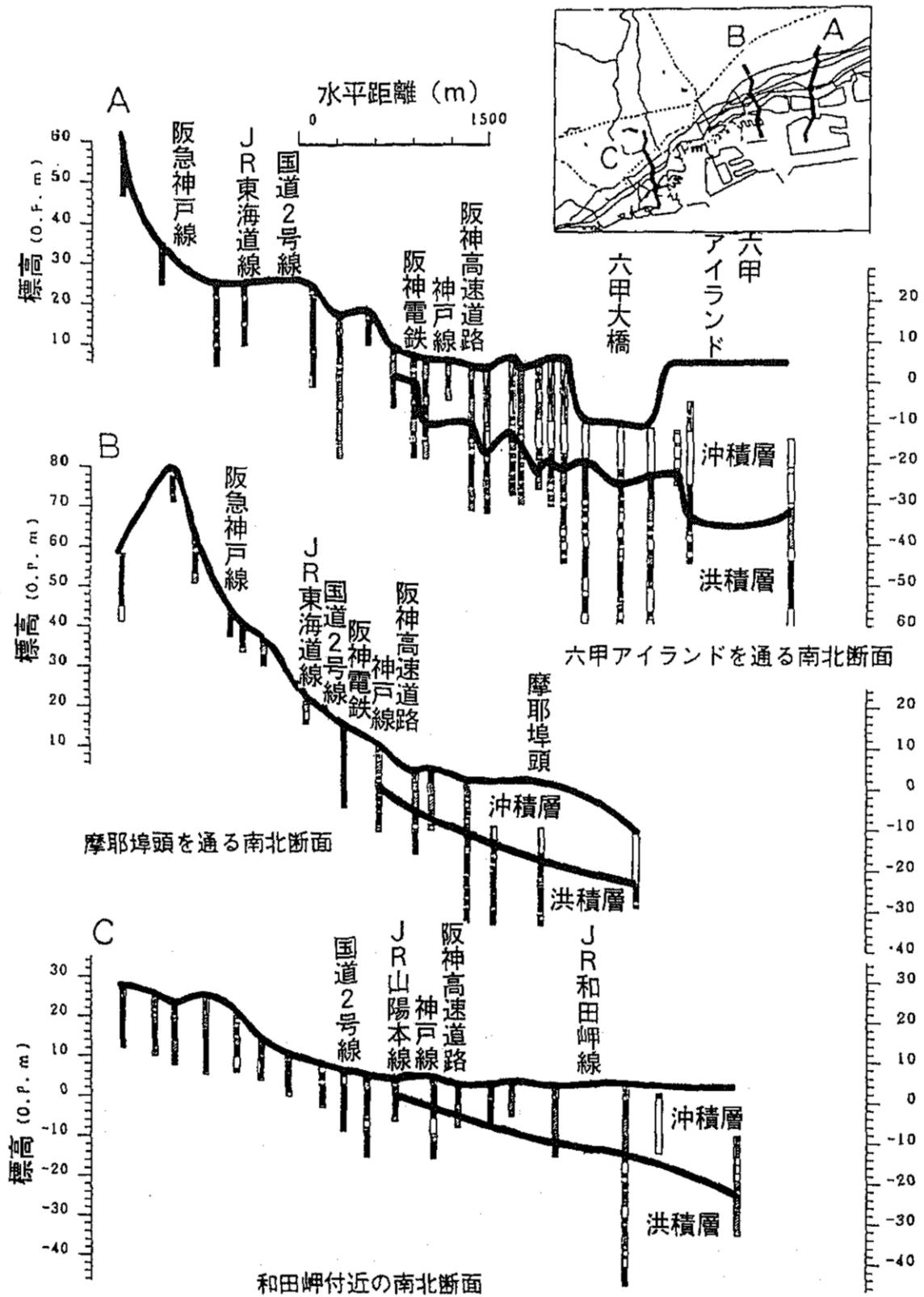


図2. 1-3 地質断面図 (Geologic sections)

出典：日本建築学会地震災害調査WG[2.1-4]

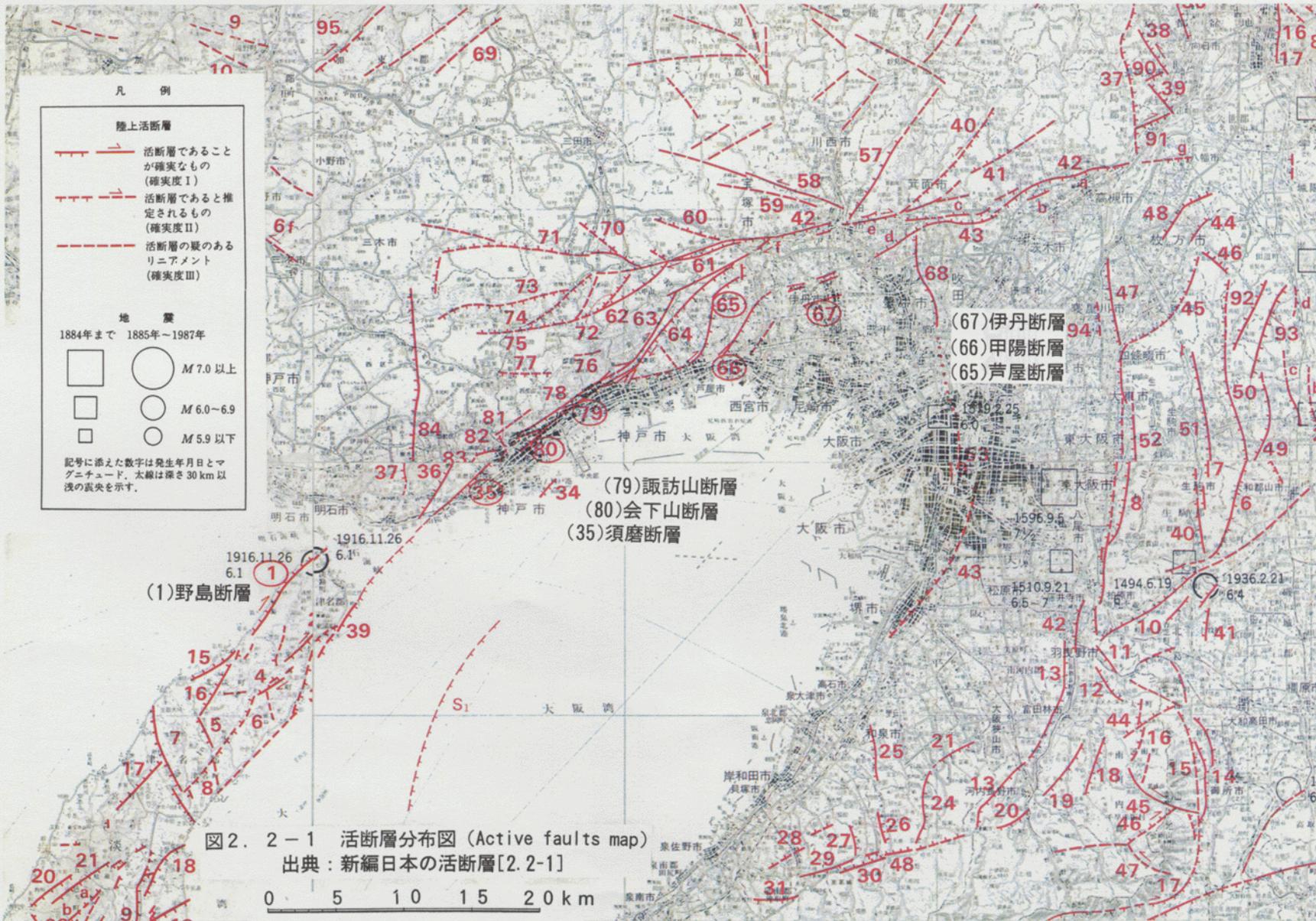


図 2. 2-1 活断層分布図 (Active faults map)
 出典: 新編日本の活断層 [2. 2-1]